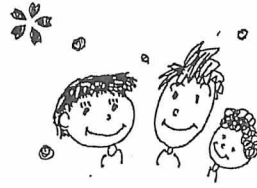


よりそう

Side by Side



第46号

編集責任 進谷

編集担当者
進谷

「写真」のチカラ



「3・11肖像写真プロジェクト」は、震災復興支援の一環として行われている、プロカメラマンによる被災者の撮影会だ。リーダーで東京在住のカメラマン・小林伸幸さんのほか、このプロジェクトに賛同した数名のカメラマンやヘアメイクアーティストなどが参加。週末を利用して東京をマイクロバスで出発し、岩手県内の避難所を周っている。今月18日は大槌町の大槌高校、城山公園体育館、安渡小学校で、19日にはこれら3ヵ所に加えて山田町の豊間根保育園で撮影会を行い、2日間で約90組を撮影した。撮影した写真は3週間後に被災者に届けるうえ、近い将来、東京で展覧会を開く計画があるという。

白背景で撮影

「写真プロジェクト」では、希望者には髪の毛のセットと化粧を施し、カメラマンは約10分間の撮影中、細かい指示を次々に出して様々なポーズを取らせて撮影する。小林さんいわく「個人の個性を引き出す」ことを目的としている。

撮影の背景は白。「白紙に戻す」という言葉があるように、白という色は浄化や何かをリセットするという意味があるそうだ。「写真プロジェクト」は、このような意味合いを考慮して背景を白にした訳ではないかもしれないが、震災から3ヵ月半が過ぎた今、被災

者が白背景で写真を撮るとするのは、「日常生活に戻る」象徴的な出来事だといえるだろう。

たかが化粧、されど化粧

このプロジェクトでは「化粧のチカラ」も顕著だ。被災者は、様々な理由で普段は化粧をしない、またはできない方が多いと聞く。ところが、「撮影後に『化粧したからカラオケでも行こうか』と被災者の方がおっしゃるなど、化粧をすると明るい気分になって積極的に外に出ようという気になるみたいです」とヘアメイクさんが語る。化粧は外見を変えるだけではなく、気持ちにも正の影響を与えるようだ。

「またきてください。」

「写真プロジェクト」における写真撮影というのはツールであり、真の目的は被災者と交流し、喜んでいただくことであると思われる。ヘアメイクさんがある被災者の髪をセットしながら「東北の方はみなさん、肌がきれいですね〜」などと話しかけ、会話が弾む。ある6人の少女グループが全員同時にジャンプしている写真を撮影しているとき、全員のタイミングが中々合わなかったが、小林さんは細かい指示を出しながら何度も取り直した。被災者とプロジェクト関係者が交流してお互いに協力し合いながら撮影する、というプロセスこそ被災者には思い出として残ることだろう。

19日の撮影終了後に、安渡小学校での撮影に参加した小学6年生の仲良しグループ5人が、「メイクをしてくれたお姉さん、写真を撮ってくれたおじさん、受付のお姉さんへ」宛てた手紙が、少女たちの「3・11肖像写真プロジェクト」への気持ちをよく表している。

「メイクは、とてもかわいくて感動しました。この震災前(より)からもそのあともおしゃれしてかんだうしたことはありませんでした。たのしく写しんをとれたのはうれしかったです。またきてください。(原文のまま)」

※月曜・木曜は休刊日になります。

まごころ種 募集

くわしくはHPへ

6/23(木)ボランティアミーティングはPM5:30~@体育館

6/22(水)の宿泊:153人、活動:123人

～お知らせ～

- ・生ゴミ用のゴミ箱を設置しました
- ・社協の車は、指定の場所に駐車してください

・長期でいる方と若い方は、車を第3駐車場に止めてください

6/23 (木) 天気 11 雨時 12 曇
気温 20℃ ~ 26℃
降水確率 70%